



 NASHIM設立30周年記念シンポジウム
2022年2月20日、長崎

HICAREの概要について

HICARE幹事
児玉和紀

K. Kodama, NASHIM Symposium, 2022 1

それでは HICARE の概要についてご説明申し上げます。



HICARE ですが、日本語名は放射線被曝者医療国際協力推進協議会で非常に長い名前でございます。英語名が、Hiroshima International Council for Health Care of the Radiation-Exposed という風に言いまして、その頭文字をとって HICARE というふうに言っております。

この HICARE ですが、広島原爆放射線の医学医療に関わる 8 つの機関と 2 つの行政機関の連合体で 1991 年に設立されております。この 8 つの機関ですが、ご覧の通り、広島大学医学部、広島大学病院、広島大学原爆放射線医科学研究所、広島県医師会、広島市医師会、放射線影響研究所、広島原爆傷害対策協議会、そして広島赤十字原爆病院でございます。2 つの行政機関と申しますのは広島県と広島市でございます。

放射線被曝者医療国際協力推進協議会 (HiCARE)
- 設立の目的 -

人類で最初に原子爆弾による惨禍を被った広島が有する原爆被曝者治療の実績及び放射線障害に関する調査研究の成果について、国内外の被曝者の医療に有効に生かしていくための体制をつくり、もって広島の世界への貢献と国際協力の推進に資する。

(<http://www.hicare.jp/about/>)
K. Kodama, NASHIM Symposium, 2022 3

この HICARE 設立の目的ですが、ここに書いておりますように人類で最初に原子爆弾による惨禍を蒙った広島が有する原爆被曝者治療の実績および放射線障害に関する調査研究の成果について、国内外の被曝者の医療に有効に生かしていくための体制をつくり、もって広島の世界への貢献と国際協力の推進に資するというものでございます。

HICAREの事業：医師等の受入研修

1991年からの研修受入実績（2020年3月31日時点）
37カ国, 768人（1,747人*）

（*：他の機関より依頼された研修実施分を含む）



HICAREの事業について説明いたしますが、まず医師等の受入研修がございます。対象になる方々は、世界各地で放射線被曝者の治療等に当たっている医療従事者でございます。目的は技術指導及び医療情報の提供でございます。

1991年にHICAREが発足いたしました。それから2020年の3月末までに37カ国768人の研修生を受け入れております。括弧の中に1747人という数字がございますが、これは他の機関より依頼された研修実績分を含んだ数字でございます。

HICAREの事業：専門家派遣

2009年12月3日 トーランス、米国カリフォルニア州

- 対象者：世界各地で放射線被曝者の治療等に
あたる医療従事者
- 目的：技術指導および医療情報の提供



それから専門家派遣という事業もしております。この対象者は、先程の研修生受け入れと同じでございます。世界各地で放射線被曝者の治療等に当たっている医療従事者が対象になります。目的は同じく技術指導及び医療情報の提供でございます。

この写真ですが、これは2009年の12月にアメリカのカリフォルニア州トーランスで研修会を行った時のものです。

HICAREの事業：普及啓発（講演会等の開催）

2016年2月27日 HICARE被爆70年国際シンポジウム
- 原爆被爆70年 被爆者医療体験の継承と国際貢献 -



普及啓発も事業の一環で事にありまして、まずその講演会の開催がございます。対象者は、広島県民ならびに市民で、目的は放射線被曝者医療に関する国際協力推進の意義と、必要性などを啓発するものでございます。

この写真ですが、これは2016年2月にちょうど原爆被爆70年になる年でありましたので、「HICARE 被爆70年国際シンポジウム」で副題として「原爆被爆70年被爆者医療体制の継承と国際貢献」と題して講演会を開いた時のものです。

HICAREの事業：普及啓発（出版事業）

- 1992年：被爆者医療の解説書
「原爆放射線の人体影響1992」を出版
医療従事者向けに作成した本書は
原爆医療白書とも言える医療解説書
(HICARE編、原爆放射線の人体影響1992。東京、
文光堂、1992。ISBN4-8306-3722-6 C3047)
- 1995年：英語版を出版
- 2012年：その後の研究成果や新しい
知見を盛り込んで、20年ぶりに改訂第2版)
を出版
(HICARE編、原爆放射線の人体影響 改訂第2版。
東京、文光堂、2012。ISBN978-4-8306-3741-4)
- 2013年 日本語要約版作成
- 2017年 英語要約版作成



(<http://www.hicare.jp/press/>)
K. Kodama, NASHIM Symposium, 2022 7

普及啓発には出版事業もございます。1992年に被爆者医療の解説書であります「原爆放射線の人体影響 1992」これを出版いたしました。これは医療従事者向けに作成したものでありまして、原爆医療白書とも呼ばれたことがあるものでございます。95年には英語版を出版しております。

そして2012年ですが、最初の出版1992年からその後の研究成果や新しい知見を盛り込んで二十年ぶりとなりましたが、改訂第二版を出版しております。2013年には日本語要約版を作成し、2017年には英語要約版を作成いたしました。

HICAREの事業：普及啓発（出版事業）



(HICARE 編、原爆放射線の人体影響 改訂第2版。
東京、文光堂、2012、ISBN978-4-8306-3741-4)
(<http://www.hicare.jp/press/>)

K. Kodama, NASHIM Symposium, 2022

8

そして、この原爆放射線の人体影響の出版に際しては、HICARE の国産国際貢献につきまして NASHIM の国際貢献についても NASHIM の先生に執筆を頂いております。

HICAREの事業：人材育成（出前講座）

2019年10月4日 広島市立広島中等教育学校

- ・対象者：地元の高等学校生徒
- ・目的：世界に貢献する人材育成の一助
- ・原爆被爆者医療・国際貢献について講演
- ・2018年開始



(<http://www.hicare.jp/lecture/>)

K. Kodama, NASHIM Symposium, 2022

9

人材育成も非常に大切な後継者を育成するという意味で大切な事業であります。その一環で出前講座を始めております。対象となる人達は地元の高等学校の生徒さんで目的は世界に貢献する人材育成の一助になるようにということで行っております。

原爆被爆者医療国際貢献について講演をしております。2018年に開始いたしました。

この写真ですが、これは2019年に広島市立広島中等教育学校で出前講座を行う時のものでもございます。

国際原子力機関(IAEA)とHICARE



2014年5月26日

「放射線の影響と人の健康に関わる人材の育成」
事業において IAEA協働センターに指定された

(<http://www.hicare.jp/iaea/>)

K. Kodama, NASHIM Symposium, 2022

10

それから HICARE の特徴と申しますが、それに国際原子力機関 IAEA との協働がございます。

2014年の5月に放射線の影響と人の健康に関わる人材の育成という事業におきまして、IAEAの協働センターに指定されました。

IAEAとHCARE：人材育成（インターンの派遣）

IAEA インターンプログラムへの医学生派遣（2013年～）

- ・目的：グローバルな視点から被爆者医療の意義と必要性を理解し、広島の有する原爆被爆者治療の実績と研究の成果を承継する人材を育成するため
- ・対象者：広島大学医学部医学科4年生
- ・派遣先：IAEA原子力科学応用局ヒューマンヘルス部
- ・第1回：2013年10月1日～12月31日
- ・第2回：2015年10月5日～2016年1月4日
- ・第3回：2016年10月1日～12月31日
- ・第4回：2017年10月1日～12月31日
- ・第5回：2018年10月1日～12月31日
- ・第6回：2019年4月1日～6月1日



(<http://www.hicare.jp/iaea/>)

K. Kodama, NASHIM Symposium, 2022

11

協働センターとしての事業をいくつもあるんですが、その一つに非常に我々重要なものだというふうに位置づけておりますが、人材育成としてインターンの派遣がございます。これは IAEA インターンプログラムへの医学生の派遣ということで2013年から始めております。

目的は、グローバルな視点から被爆者医療の意義と必要性を理解し、広島の有する原爆被爆者治療の実績と研究の成果を承継する人材を育成するためのもので、対象者は先ほども言いましたが、広島大学医学部医学科の4年生で、派遣先は IAEA 原子力核応用局ヒューマンヘルス部でございます。

第1回は2013年ですが、その後第6回まで派遣を続けてまいりましたが、2020年2021年はコロナ渦の影響で中断せざるを得ない状況になっております。

第1回は2013年ですが、その後第6回まで派遣を続けてまいりましたが、2020年2021年はコロナ渦の影響で中断せざるを得ない状況になっております。

これは第1回のインターンプログラムへの派遣された方でございます。

2021年2月11日 HICARE国際シンポジウム
被爆75年・HICARE設立30年・福島事故10年
～これからの30年も世界のために～

【基調講演】 座長：丹羽太貴（放影研）
1. IAEAヒューマンヘルス部の活動及びHICAREとの連携
メイ・アブデル・ワハブ（IAEA原子力科学応用局）
2. 放射線・原子力緊急事態におけるメンタルヘルスおよび心理的支援
のためのWHOの枠組み
ザナット・カー（WHO気候変動・健康・環境局放射線チーム研究員）

【第1部】 座長：前田亮（広島原対協）
① HICARE30年の歩み 児玉和紀（放影研）
② 広島原医研の取り組みと今後の展望 田代聡（広島原医研）
③ ご恩返し・支援と教訓を踏まえて 長谷川有史（福島県立医大）
④ 長崎から世界へ・NASHIMの取り組み 高村昇（長大原研）
⑤ ここまで来た放射線治療 永田靖（広大）

【第2部】 これからのHICARE 座長：児玉和紀
パネリスト：前田亮、田代聡、長谷川有史、高村昇、永田靖
特別発言：今後の広島が果たすべき役割と展望に係る提言「世界の
ヒバクシャから30年」 今中亘（中国新聞社特別顧問）
(<http://www.hicare.jp/lecture/>) 12

K. Kodama, NASHIM Symposium, 2022

それから昨年2月に、HICAREの国際シンポジウムを開催いたしました。これは被爆75年、HICARE設立30年、福島事故10年、そしてこれからの30年も世界のためにというメインテーマをもとに行ったものです。

基調講演に引き続いてシンポジウムの第1部、第2部を開催いたしました。

第一部では、私がHICARE三十年の歩みについて説明をし、福島県立大学からは長谷川先生にご参加いただいでご恩返し支援と教訓を踏まえて、そして長崎からは高村先生に長崎から

世界へ NASHIM の取り組みということでご講演をいただいております。

第二部ではこれからの HICARE ということで座談会を行っておりますが、私が座長を務めて福島の長谷川先生、長崎の高村先生にご参加いただいで議論をいたしました。

そして特別発言として、今後の広島が果たすべき役割と展望に関わる提言ということで、中国新聞社の特別顧問今中さんに特別発言をしていただいております。

中国新聞 2021年2月12日掲載

HICARE30年 オンラインで記念シンポ

長崎・福島と連携確認
ヒバクシャ医療次世代へ

HICAREの今後の役割などについて
オンラインで座談会を交わす関係者たち

K. Kodama, NASHIM Symposium, 2022

13

このシンポジウムの翌日、地元で報道されまして、HICARE三十年のオンライン記念シンポが開催されたということと、これからの HICARE ということで議論された大きな課題が被ばく者医療次世代へということで、次の世代へ被爆者医療 HICARE の活動を担ってくれる方々の育成が喫緊の課題であるということと、もう一つ HICARE だけでということではなくて長崎・福島と連携をしていくべきだということが大きなシンポジウムのポイントだという形で報道がされております。

ご清聴ありがとうございました



長崎平和公園 広島平和記念公園

K. Kodama, NASHIM Symposium, 2022

14

私の説明は以上です。ご清聴ありがとうございました。